



2018年へのひと言

「復興」から「飛躍」へ!

## 師の言葉「大学では 学の蘊奥<sup>うんおう</sup>を究め、 天下国家を論じろ」

尾池 守 石巻専修大学長

### 第2の父とも言える恩師は 天才肌の「親分」先生

新年、あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いたします。おかげをもちまして石巻も震災から7年が経過しました。本年、私としては「復興」という意識から、「飛躍」へと変えていければと考えています。一足飛びに地域経済が活性化し、本学へ進学する学生が増えるのが理想ですが、なかなか一度には難しいと感じています。しかし、これまでの復興で築いた地盤があります。一歩ずつ前へ進み、一人でも多くの学生に対し、学びの場としての本学の役割を果たしていきたいと考えています。

企画のテーマについてですが、私を変えた方となると、恩師の笹田直先生です。私は群馬高専の出身なのですが、エンジニアになるために同校への道を進みました。大学に進学すると高校と大学で7年間ですが、高専なら5年間

で済むというのが進学の原因でした(笑)。しかし入学してみるとさらにエンジニアとしての技術を身に付けたいと考え、東工大へと編入しました。私は機械工学が専門ですが、物理や化学など理学に近いことが好きでした。

東工大の3年次に編入し、科目を見ると「トライボロジー」というものがありました。まずそれはなんだろう?と。初めて見る名称でした。笹田先生の講義を聴いたら、「物には端があるんですかね?」ということを出されたのです。「君たち、この木の端はどうなってるのかね?」「木の原子があるでしょう、でも1個の原子の上には1秒間に10の9乗個の酸素分子と窒素分子がくっついたり離れたりしてるんです」と。「その酸素分子、窒素分子とは、物の端なんですか? それとも違うのでしょうか?」とおっしゃったわけです。

「トライボロジー」は相対運動する物体の界面に生じる現象に関する学問分

野なのです。「トライボロジー」という言葉は1960年ぐらいにイギリスで省エネの研究から、摩擦を軽減するにはどうするか? 摩擦を減らせば、省エネにつながるのではないかと。というところから生まれたのでした。機械工学なのですが、理学的なこともできることで、私は笹田先生に学ぶことが好きになってしまいました。

ただ卒業研究時にはじゃんけんで負けて笹田研究室に入れなかったんですけどね。結局、大学院に進んだ時に笹田研究室へ入ることができました。先生には卒業研究時に、かなり文句を言われたものです(笑)。

笹田先生は私から見ると天才でした。先生は碁をされましたが、東大在学中に碁のチャンピオンになっています。私が学生として学んだ時に先生は40代後半でしたが、その当時でもプロになるか悩まれていたほどの実力者でした。

またよくおっしゃっていたのが「大学とは学の蘊奥<sup>うんおう</sup>を究めるところだ。どうせ話をするなら天下国家を論じろ」ということです。話も多岐にわたっていて、研究以外にもたくさんしてくださいました。ある時、「お地蔵様には聞く地蔵と聞かぬ地蔵がある」とおっ

しゃいました。願いを聞くお地蔵様と、どんなに願をかけても聞いてくれないお地蔵様です。笹田先生は「俺は聞かぬ地蔵だから俺に頼むなよ」と言うんです。実際には本当に学生が困った時にはいろんなヒントを出してくださいました。そんな笹田先生ですから、私たちは親しみを込めて「親分」と呼んでいました。

笹田先生とは修士2年、ドクターコース3年の5年間のお付き合いでした。ドクターコースを修了した時には「努力でドクターを取れた例は初めてだ」と言われました。私は何度も同じ実験を重ねていましたから、天才肌の笹田先生から見れば、ひらめきがなければいい論文は書けないと思っていたかも知れません。しょうがねえなあ、目をかけてやるか、と面倒を見てくれたのではないのでしょうか。

笹田先生がいらっしゃらなければ、私が研究者になれたかどうかかわからないですね。私にとっては第2の父と言ってもいいと思います。

### 休耕地を活用した養殖で 草葉からたんぱく質を得る

私は今年の春を迎えると、学長就任から丸2年が経過し、3年目となります。1年目で坂田前学長の流れを継ぎ、2年目には教職員のなかに将来への危機感のようなものが醸成されはじめ、数々の提案が生まれました。私立大学研究ブランディング事業の取り組みも始まりまし、また大学の改革、あるいは教育の質の保証を確保するため、組織の見直しも行いました。3年目の本年はそれらを結果に結びつけていきたいと考えています。

学生に対しては、学生一人ひとりが目的を成就できる環境づくりにより一層力を注ぎたいと思っています。昨年、



笹田研究室同窓会  
(2008年5月1日)

社会に輩出したい人物像を設定しました。それは「社会の諸問題に対して、自らの役割を自覚して生涯学び続けることができる学生」というものです。この言葉には二つの意味が込められています。一つ目、「自らの役割を自覚できる」ということの意味は、他人の目で自分を見られる……ということですね。他人が自分を見た時に、相手が求めることを想像できる人間を育てたいと、考えています。二つ目は、社会人として出会う問題の多くは答が見出されていないか、答を一つに特定できない問題です。本学では、与えられた課題に対して自分なりの最善の答を見出す方法を学びます。日進月歩する社会の現状では、自ら納得できる答を見出すために、新たな手法や知識を吸収する必要があります。正に「生涯にわたって学び続けること」が重要です。

現在、大学では石巻に、新たな産業を興すという試みをしています。いま行っているのが内水面での養殖です。石巻では農業に従事する人の高齢化、後継者不足、塩害による土地の被害がありました。土地については土地改良されたものの休耕地が多く見られます。そこで、休耕地に水槽をつくって魚介類を育てよう、という研究ブランディ

ング事業が2016年から進行中です。

草葉を餌にプランクトンを育て、今度はそのプランクトンを餌に小魚やエビなどを育て、食物連鎖させて養殖する魚へと行きつく……つまり草葉がたんぱく質へと変わるわけです。食物連鎖ですから廃棄物も出ず、大きなエネルギー消費もないのに草葉からたんぱく質が出来るということは一つの大きなチャレンジです。今現在、水槽が完成するところまで進行しています。2018年にはカタチになり、草を由来として魚介類が養殖できたというニュースをお伝えできると思います。

創立30年を迎える本年ですが、30年を経て建物、設備、実験装置など、耐久の限度を迎えるものが目立つようになりました。設備に関しては、近年新しいものが多数出ています。特に実験に関わる装置は技術の進歩がすごいので、そのあたりの拡充をめざすつもりです。

また大学進学者たる若者の人口が減るなか、本学のブランドをつくり上げる必要があると実感しています。常に動き、上をめざしてやっていく所存です。PDCAサイクルを上手く機能させていきたいと考えています。

(2017年10月25日 神田校舎にて)